



Data	2025-107
監督・脚本:	マチュー・デラポルト、アレクサンドル・ド・ラ・バトリエール
原作:	アレクサンドル・デュマ
出演:	ピエール・ニネ／アナイス・ドゥムースティエ／バステイアン・ブイヨン／ロラン・ラフィット／パトリック・ミル／アナマリア・ヴァルトロメイ／ヴァシリ・シュナイダー／ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ

みどころ

私は小学生の時（1960 年前後）に、少年少女世界文学全集と日本文学全集、そして『偉人伝』のほとんどを読み尽くしたが、その当時のフランス文学で強く心に残っているのがヴィクトール・ユゴーの『レ・ミゼラブル（ああ無情）』（1862 年）とアレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯（巖窟王）』（1844～46 年）だ。

当時は貧しかったが、以降高度経済成長を続けた日本は平和で豊かな国になったから、それらの文学の多くが映画化され、楽しむことができた。劇団四季のミュージカル『レ・ミゼラブル』はその典型だが、今般なぜかフランスで『モンテ・クリスト伯』が公開され大ヒットしたから、こりや必見！

こんな作品を楽しむコツは、時代背景をしっかりと把握した上、主人公をはじめとする多くの登場人物のキャラを掴むこと。それさえできれば、ストーリー展開は分かりやすく面白いから、3 時間はあつという間だ。

他方、長年読み継がれているアレクサンドル・デュマ文学の素晴らしさをどう感じ取るかは、あなたの感受性の問題！幸い 76 歳の私はまだ“少年の心”を持ち続けているから、壮大な物語をハラハラドキドキしながら鑑賞するとともに、ラストに向けての「大きな問いかけ（問題提起）」を率直に受け止めることができたが、さてあなたは？

■デュマ VS ユゴー 2 人の文豪に注目！■

私は小学生時代に図書館にあった少年少女世界文学全集と日本文学全集そして『偉人伝』のほとんどを読み尽くしたが、中でも強く印象に残っているフランスの作品が、ヴィクトール・ユゴーの『レ・ミゼラブル（ああ無情）』（1862 年）であり、アレクサンドル・

デュマの『三銃士』(1844年)や『モンテ・クリスト伯(巖窟王)』(1844~46年)だ。

その時代は1950~60年頃だったから日本全体が貧しかったが、60年代から高度経済成長時代に入った日本は平和の中で豊かになり、小学生の時に読んだ世界文学全集の小説は次々と映画化された。それがレオナルド・デカブリオが主演した『仮面の男』(98年)や『三銃士／王妃の首飾りとダ・ヴィンチの飛行船』(11年)、『シネマ27』未掲載)であり、また劇団四季のミュージカル『レ・ミゼラブル』、や、ヒュー・ジャックマンとラッセル・クロウが主演した映画『レ・ミゼラブル』(12年、19年、23年)、『シネマ30』48頁、『シネマ46』120頁、『シネマ57』83頁)等々だ。しかして、今なぜかアレクサンドル・デュマの代表作たる『モンテ・クリスト伯』が約3時間の巨編としてフランスで映画化され日本でも大公開。こりや必見！

■□■INTRODUCTIONは？ストーリーは？■□■

本作のパンフレットのINTRODUCTIONには次のとおり書かれている。すなわち、

文豪アレクサンドル・デュマが1844~1846年に発表した冒険小説「モンテ・クリスト伯」は、時代を超えて読み継がれ、今なお世界中で愛されている。「三銃士」と並ぶデュマの代表作であり、日本では『巖窟王』の題名で親しまれているこのフランス文学における不朽の名作は、幾度となく映像化や舞台化がなされ、アニメ、コミック、ゲームといったサブカルチャーのモチーフにもなってきた。そんな名作を本国フランスが新たに映画化した本作は、第77回カンヌ国際映画祭でワールドプレミア上映され、11分間におよぶ熱狂的なスタンディング・オベーションを獲得。フランス国内で940万人以上の観客を動員する大ヒットを記録したのを皮切りに、全世界興収1億ドル超えを達成し、第50回セザール賞では最多14部門にノミネートされ、衣装デザイン賞、美術賞を見事に受賞した。

本作が世界中で絶賛を博した大きな要因は、デュマの傑出した原作小説の魅力をあますところなく凝縮した映像世界の圧倒的なスケール感とクオリティの高さにある。“復讐ドラマの金字塔”とも評されるそのドラマティックなストーリーには、激しい情念が渦巻く人間ドラマとラブ・ロマンス、めくるめく謀略の罠に息をのむサスペンスとミステリー、登場人物の生死を賭したアドベンチャーとアクションが満載。あらゆる娯楽ジャンルの要素を網羅したスペクタクルを追求しながら、フランス映画ならではの甘美なエレガンスをまとった仕上がりは、まさに“究極の映画化”と呼ぶにふさわしい。

なるほど、なるほど。

映画やミュージカルの『レ・ミゼラブル』では壮大な歴史絵巻の中で展開される壮絶な人間ドラマに感動したが、『モンテ・クリスト伯』はナポレオン没後という時代状況の中で展開される、ある意味でドロドロした、おどろおどろしい復讐物語だが、その壮大な人間ドラマは複雑で簡単に解説できるものではない。そこで、パンフレットのINTRODUCTIONにある本作の物語を引用すると次のとおりだ。

1815年、マルセイユの若き航海士エドモン・ダンテスが、いわれなき罪を着せられ、最愛の女性メルセデスとの結婚式のさなかに逮捕される。終身刑を宣告され、孤島の刑務所に送り込まれたダンテスは、はてしない過酷な牢獄生活によって心身共に衰弱し、生きる気力さえ失っていく。しかし隣の独房に囚われた老司祭の導きによって希望を取り戻したダンテスは、奇跡的な脱獄に成功し、莫大な財宝を手に入れる。やがてイタリアの大富豪“モンテ・クリスト伯”を名乗って、パリに現れたダンテスはたちまち社交界の花形となり、緻密にして壮大な計画を実行していく。それは20年前にダンテスの人生のすべてを奪った3人の仇敵への復讐の罠だった…。

■□■念願の船長に！念願の結婚も！そこに落とし穴が！■□■

幸福の絶頂から絶望のどん底へ！小説が「人間ドラマ」を描く以上、何よりもそんな設定が読者の興味を誘うのは当然だ。それを知り尽くしている19世紀のフランスの文豪アレ

クサンドル・デュマは、『モンテ・クリスト伯』の導入部でまず、マルセイユの若き航海士エドモン・ダンテス（ピエール・ニネ）が新たな船長に任命される姿と、永遠の愛を誓った名家の女性、メルセデス（アナイス・ドゥムースティエ）との結婚が決まり、結婚式に臨む姿を描いていく。ところが、そこでのミソは、結婚式の当日、ダンテスが「ナポレオンを支持する反逆者」という謂われなき罪で逮捕されてしまうことだ。まさに、そんなスリリングな導入部のストーリー展開に注目！

■□■壮大な小説には個性的な主人公が！この主人公に注目■□■

世界文学全種に名を連ねる壮大な小説には、当然それぞれ超個性的な主人公が登場する。例えば、トルストイの『戦争と平和』ならピエール、アンドレイとナターシャの3人、ドストエフスキーの『罪と罰』なら、老婆殺しの実行犯となる貧しい青年ラスコーリニコフ、『カラマーゾフの兄弟』ならフォードル、ドミートリイ、イヴアン、アレクセイの4人兄弟だ。また、ユゴーの『レ・ミゼラブル』ならジャン・ヴァルジャン、『三銃士』ならアトス、ポルトス、アラミスと若き銃士ダルタニアンだ。さらに『パピヨン』（1973年、2017年）（『シネマ57』78頁、『シネマ45』127頁）ならタイトルどおりの主人公パピヨンだ。

壮大な復讐をテーマにした本作の主人公ダンテスが、「ナポレオンを支持する反逆者」という謂われなき罪で逮捕され、裁判も経ないまま終身刑を宣告され、イフ城塞の牢獄に閉じ込められる姿はあまりにも理不尽としか言いようがない。私は学生運動にのめり込んでいた大学1回生と2回生の夏休みに1日1冊ずつ小説を読破していたが、その当時の最も心に残った小説の一方は、人気小説の代表作たる司馬遼太郎の『坂の上の雲』（1968年～72年）であり、他方はクソ難しい小説の代表たる高橋和巳の『邪宗門』（65～66年）だった。双方とも壮大な構想にふさわしい超個性的な主人公だったが、本作の主人公ダンテスもそれと同じく、超個性的な主人公なので、その個性をしっかりと！

■□■牢獄での出会いは？脱獄は？華麗なる変身は？■□■

フランス革命は1789年。フランスはその後、ナポレオンの抬頭、隆盛、没落の時代が続いたが、本作冒頭のダンテスの地中海での人命救助や船長への任命、そしてメルセデスとの結婚というめでたい式での逮捕という事件が次々と起きたのは1815年だ。そもそも、ダンテスの逮捕劇の発端は、航海中のダンテスが救った女性アンジェルの直筆の密書を持っていたこと、という事実が、本作の歴史的状況を象徴している。

ダンテスはイフ城塞の牢獄での最初の4年間で完全に生きる気力を失っていた。しかし、隣の独房に収監されていたファリア司祭（ピエルフランチェスコ・ファヴィーノ）が6年間にわたり脱獄のためにトンネルを掘り続けていたことを知った上、さまざまな彼の言葉に勇気づけられると・・・。

このファリア司祭が、①テンプル騎士団の最後の騎士であったこと、②イタリアのモンテ・クリスト島にテンプル騎士団の財宝を埋めていると教えたこと、③ファリア司祭の死亡に伴ってダンテスが脱獄に成功したことは、すべて波乱万丈に富む小説ならではの“作

りゴト”の連続だが、小説は何でもありだから、それでいい。

航海士から船長に任命された 1815 年には 26 歳だったダンテスが、脱獄後テンプル騎士団の財宝を入手し、イタリア随一の大富豪モンテ・クリスト伯を名乗った時は 40 歳を過ぎていたが、それはそれで仕方ない。脱獄に成功し、テンプル騎士団の財宝を一人占めにした彼は、その 1 年後マルセイユに戻り、かつて地中海で命を救った女性アンジェルの元を訪れる中で、さまざまな情報を入手したが、彼は今後どのように生きていくの？そして、5 年後、ダンテスがイタリア随一の大富豪モンテ・クリスト伯を名乗り、パリの社交界に名乗り出てきたのは一体何のため？



■□復讐のターゲットとなる登場人物はこの 3 人！■□

ダンテスの復讐のターゲットにされるのは次の 3 人だ。まず第 1 は、ダンテスを「ナポレオンを支持する反逆者」という謂われなき罪で終身刑とし、イフ城塞の牢獄に送り込んだ検事ヴィルフォール（ロラン・ラフィット）。フランス革命から約 25 年後となる 1815 年当時の裁判のシステムが「近代法」として整備されていないのは仕方ないが、それにしても本作に見るヴィルフォール検事のダンテスに対するやり口はハチャメチャだ。あれから約 15 年、ダンテスはモンテ・クリスト伯として今パリの社交界に登場したが、その時ヴィルフォール検事は法曹界のエリートに出世していた。したがって、彼が若い時に愛人の間に設けた私生児で、生まれた直後生き埋めにしたはずの男の子、アンドレ（ジュリアン・

ドゥ・サン・ジャン) のことなど、きれいに失念していたが、今、ヴィルフォール検事が目の前に見るモンテ・クリスト伯の正体は？そしてまた、由緒ある公爵の子息アンドレア・カヴァルカンティと名乗る若い男の正体は？

ダンテスの復讐のターゲットの第 2 は、親友でありながらダンテスを裏切り、恋人メルセデスを自らの妻としてしまったフェルナン (バスティアン・ブイヨン) だ。メルセデスとの間に息子アルベール (ヴァシリ・シュナイダー) をもうけたフェルナンは今や將軍となつて政界に進出しようとしていたが、今アルベールに近づいている美しい娘エデ (アナマリア・ヴァルトロメイ) は一体何者？

ダンテスの復讐のターゲットの第 3 は、アンジェルから入手したナポレオンの密書をダンテスのものとヴィルフォール検事に密告したダングラール船長 (パトリック・ミル) だ。ダングラール船長のそんな行為は、航海中に船長の命令を無視してアンジェルの救助に向かったダンテスの無謀ぶりを船長が船主に報告した際、船主から逆に船長が非難され、船長の身分をダンテスに奪われてしまったことの腹いせだ。この男は船長をクビになった後、奴隷貿易で富を築き、「成り上がり男爵」の称号を得ていたが、その商売の源泉はあくまでも船。つまり、船による交易が本来の儲けの源泉だ。ところが、ダングラールはある日、自らの船が消えてしまったことを口実に株でひと儲け (ボロ儲け) をするべく、モンテ・クリスト伯に一時的に巨額の借金を申し込んだところ・・・？

私はポルトガルとスペインの後を継いで 17 世紀のヨーロッパの先進国になったオランダで、チューリップを投機の対象とする“土地バブル”ならぬ“チューリップバブル”が起きたことを、映画『チューリップ・フィーバー 肖像画に秘めた愛』(17 年) (『シネマ 43』240 頁) で初めて知ったが、そんなオランダに代わって世界の海の覇者になったイギリスは 17~18 世紀、貿易の他、株でも大いに稼いでいたらしい。

ダングラール船長は、フランスでも、その株によって一儲け (ボロ儲け) しようと企んだわけだが、その結末は？

■□■モンテ・クリスト伯への協力者 (共犯者) はこの 2 人！■□■

本作は壮大な復讐物語だから、主人公ダンテスと彼が復讐のターゲットとした前記 3 人の男たち以外の登場人物も数多い。しかし、約 3 時間にまとめた本作は、小説の登場人物すべてを登場させず、適宜ピックアップしているし、登場人物のキャラクターの一部変更もしているのは当然だ。しかし、本作のメインとして登場するダンテス (モンテ・クリスト伯) の復讐への協力者 (共犯者) は次の 2 人だ。

その第 1 は、父親のヴィルフォール検事から生き埋めにされそうになった、愛人との間に生まれた男の子、アンドレ。彼は、ダンテスが地中海で命を救った女性アンジェルが、ヴィルフォール検事の殺害を決意したものの、ヴィルフォール検事を殺す代わりに引き取り、育て、孤児院に入っていた男の子だが、モンテ・クリスト伯として社交界にデビューしたダンテスが孤児院から引き取り、コトの真相を話すと、実父ヴィルフォールへの怒り

をたぎらせたアンドレは迷うことなくダンテスの復讐計画に加わることに。

第2は軍人時代のフェルナンによって父親を殺され、自らも奴隷の身に貶められてしまった、ギリシャのジャニナ地方の太守アリ・パシャの娘であるエデだ。美しく成長したエデはモンテ・クリスト伯の娘になりすましてフェルナンとメルセデスの1人息子アルベールを巧みに籠絡したが、もちろんダンテスの復讐計画ではそんな恋が実るはずはない。しかし、『レ・ミゼラブル』でジャン・ヴァルジャンが実の娘のように育てた、ファンティースの娘、コゼットが、革命闘争の中で死にかけていたマリウスとの間に新しい恋を育んでいくのを見たジャン・ヴァルジャンが、最終的には2人の恋を認めたのと同じように、モンテ・クリスト伯もエデとアルベールとの恋を認めるの？本作ラストに向けてはそんな人間らしい視点もしっかりと。

■□■壮大な物語の展開と結末は自分自身の目でしっかりと！■□■

本作は約3時間の大作だが、一瞬たりとも目を休ませることなくスクリーンを凝視し続けることになるのは、何よりもそのストーリー展開がスリリングで面白いためだ。謂われなき罪での収監と脱獄という前半のストーリー展開と、「華麗なる変身」から始まる後半の壮絶な復讐物語の「2部制」からなる本作は、一瞬たりとも観客を飽きさせることはない。

『レ・ミゼラブル』では、前半は逃げるジャン・ヴァルジャンとそれを追う警官ジャヴェールとの追跡劇と、互いの「人は何のために生きるのか？」という人生論が興味深かったが、後半からは転じて、マリウスとコゼットという若い恋人同士のこれからの人生が新しいテーマになっていた。本作もそれと同じように、ダンテスとヴィルフォール検事との剣と剣による対決や、ダンテスとアルベールによる、『戦争と平和』で観たナターシャを巡るピエールとワシーリィ・ドミートリチ・デニソフとのピストルによる古式豊かな「決闘」と同じような風景が登場するが、後半からは少しずつその“復讐”というテーマが修正されてくるので、それに注目！つまり、本作のラストに向けては、あくまで復讐に固執するのか、それとも復讐の過程で新たに生まれた若い男女の恋により高い価値を見出すのか、という論点が、アルベールとエデとの恋を巡って急浮上してくるわけだ。

ダンテスのダングラール船長に対する株価操作や貸付金を巡っての経済的な復讐は完璧なものになり、ダングラール船長の破産とその転落は明白だが、さすがにフェルナンについては、かつての恋人メルセデスや息子のアルベールが絡んでくる上、エデを復讐の協力者として使ってきたため、フェルナンに対する復讐の要素は複雑になる。ちなみに、ヴィルフォール検事もモンテ・クリスト伯も、あれほど剣の腕前が達者だったことは意外だったが、本作ラストに訪れるいかにも中世風のそんな男同士の剣による決着の行方は如何に？それを含みさまざまな本作の壮大な復讐物語の展開とその結末は、あなた自身の目でしっかりと！

2025（令和7）年11月14日記